

「未来の担い手育成プログラム研究指定校」事業報告書（3年次）

1 学校名等

学 校 名	京丹後市立丹後中学校				校長名	藤原 英一
研 究 主 題	「課題解決型の学習」を通して、生徒の自己肯定感を高め、目的意識を持ち未来を拓く力を付ける。					
研究の目的	よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、予測困難な時代に対応することができる「未来の担い手の育成」のための教育活動の充実を図る。					
学 年	1 年	2 年	3 年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	1	1	2	2	6	15
生 徒 数	17	27	44	9	97	

2 研究校の概要

（生徒の実態、学力状況(分析)、研究体制等）

素直で真面目な生徒が多く、穏やかに学校生活を送ることができる集団である。一方で、少人数で固定化された人間関係のせいか、競争心、向上心の低い生徒も少なくない。また、学習や進路に対する意識も決して高いとは言えず、高い目標をもって努力したり、改善を図ったりすることが難しい生徒もいる。PBLの取組を通して、主体的に課題に向き合い、目的意識を持たせ、自分の力を発揮できる環境の中で、正解に向かう思考力・判断力を身に付けさせたい。また、「発信力・表現力」の育成が不可欠である。本校の強みは、丹後の活性化に向けて取り組まれている地域の人材が豊富であることである。探究学習を校内やインターネットで留めることなく、地域の方々からの思いや経験を取り入れ、課題解決に向かう根拠としたい。

本研究をとおして、他者（友・大人・企業等）と協力し、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、予測困難な時代に対応することができる未来の担い手の育成のため、教育活動を充実させていきたい。

<研究体制>

校長 — 教頭 — 研究主任（教務主任） — 学年主任 — 各学年担任・副担任

- ・校長…研究推進統括、指導助言
- ・教頭…研究推進管理、運営責任者
- ・教務主任、研究主任…基本方針の推進、企画、実践の中核
- ・担任、学年主任…生徒指導、授業実践

* 研究推進委員会…教頭・教務主任・研究主任・学年主任他

* 教科代表者会議…課題解決型学習の進捗状況把握、授業改善

3 主な研究活動

(時期や内容等)

※具体例や写真・図表を用いるなど具体的な取組状況が分かるように示してください。

6 月	校内研修会 矢野コーディネーターをお招きし、教職員が講話やグループワークを通じてPBLの手 法、授業の組み立て方について学んだ。
7 月	PBLオリエンテーション（課題意識をもたせる）
8 月	中川社長による講話 中川社長をお招きし、丹後王国の概要やその取組について学習した。
9 月	総合的な学習の時間において、情報収集、課題分析、仮設構築を行い、ターゲットを決 めて課題の解決策を考察した。
10 月	職場体験学習とインタビュー調査を通じて、各事業所の強みや課題について知るととも に、自分たちの考えた課題解決策を伝えた。 また、各事業所からのアドバイスをいただいて実証実験を行い、その結果をもとに仮説 の再構築を行った。
11 月	中間発表会において自分たちの考えた課題解決策についての中間段階の提案を行い、ア ドバイスをいただいた。そのアドバイスをもとに自分たちの解決策について再検討し、 必要な部分についてはさらに検証を積み重ねた。 内容について十分に検討した後、聞き手に訴えかけられるプレゼンテーションの在り方 について考察し、実際に練習をした。

12月	校内学習発表会の午後の部を「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」の校内選考会と位置付け、各グループの最終提案を行った。
1月	「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」に向けてさらに考察を深め、プレゼンテーションの準備を行った。
2月	「第5回きょうと明日へのチャレンジコンテスト」に参加し、プレゼンテーションを行うとともに、他校の発表を聴いて自分事として考え、質問をすることができた。発表グループだけでなく該当学年の多くが参加し、大きな学びを得ることができた。  

4 今年度の研究の成果と検証

- (1) 職場体験と並行して、丹後王国を訪れた方々に対するアンケート調査を実施し、その意見を参考に自分たちの課題解決策について考察することができた。
- (2) 職場体験学習でいただいたアドバイスをもとに仮説の再構築を行い、再提案したり実物を作ったりするなどの行程を繰り返した。今年度の大きな成果としては、生徒の仮説について実際に検証することができた点である。生徒が考えたことを実現するために、丹後王国に実地調査に行く班、学校で調理をする班など、それぞれの希望した活動を保証するように心がけた。
- (3) 5月に行った学びのパスポートの質問調査項目の一部を「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」後に該当学年のみアンケートとして再度実施したところ、ほとんどの項目において5月よりも肯定的な回答が増加した。本研究を通じて協働的で探究的な学びを進めた成果として学級集団としてのまとまりと非認知能力の向上が見られたものと捉えられる。

大項目	項目	番号	小項目	2月	5月
主体性 対話	Bねばり強さ	48	難しいことでもあきらめなければ乗り越えることができる。	95.9	92.3
	C心理的安全性	59	普段の生活の中で、自分の考えを自由に話すことができる。	95.6	80.7
課題解決の育成度	A多角的思考	30	自分の考えた道すじをほかの人の視点からも考えて、見つめ直すほうだ。	79.2	73.1
	B解決意欲	31	わからない問題にであったとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。	91.6	65.4
	C柔軟な思考・目的意識	33	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。	83.3	61.5
	D情報収集	35	分からないところがあると本やインターネット、テレビなどをみたり人に聞いたりして調べる。	86.9	73.1
		36	調べたいことについて納得がいくまで調べる。	70.8	65.4
探究的な学びの質	A課題解決過程を通した子どもたちのマインド変化	20	学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある。	100.0	96.2
丹後学のねらいの達成	A地域への愛着	27	今住んでいる地域の自然や歴史について関心がある。	66.6	57.7
	B自己の生き方・在り方	22	将来の夢や目標をもっている。	87.5	84.7

- (4) 8月に中川社長の講話の中で、「将来丹後で暮らしたいか」と尋ねられた際、「丹後で暮らしたい」と答えた生徒は2名であったが、校内選考会後に授業の中で同じように尋ねたところ、10名ほどの生徒が「丹後で暮らしたい」と挙手をした。地域の観光や未来について自分事として考えることで、郷土愛が深まり、このような結果につながったのではないかと考察する。
- (5) いただいた問いに対する提案の内容だけでなく、昨年度課題として挙げていた「発信力・表現力」を高めることができ、コンテスト当日も初めて出会った大勢の人の前で堂々と自分たちらしく発表することができた。
- (6) PBLの手法を用いた授業づくりを学校として推進し、各教科でも実践されるようになり、生徒が授業の課題を自分事として捉え、真剣に考えたり意見を交流したりするようになった。

5 今年度の課題

- (1) 2学年は総合的な学習の時間のPBLが充実したことにより、他の教科授業の中でも課題解決的な学び、協働的な学びが進んだが、他学年にそれを十分に波及させていくことができなかった。総合的な学習の時間部と学習指導部、教務部が連携し、課題解決的な学習が教科授業でもさらに充実するよう、さらなる授業改善の取組と研究の充実を目指す。
- (2) 一人一台の端末を使用し、かつてとは比にならないほど膨大な情報を瞬時に得て、自分たちの考察に活かすことができるようになったが、一方でその情報、例えばグラフなどの資料を正しく読み取ることができる情報リテラシーの低さも見受けられた。Society5.0を生きていく生徒たちに、正しい情報を選別、理解、活用できる力を育む学習を、総合的な学習の時間だけでなく各教科授業の中で充実させていく必要がある。

6 研究成果の活用について

- (1) 3年間で生徒、教員ともに身に付けたPBLの手法をすべての教育課程の中で十分に活用し、さらに協働的で探究的な学習の充実を図る。
- (2) 本研究により、探究的な学びには正解のない問いを突き詰めていくことなどの困難さが伴うものの、自分事として一生懸命に考え、他者と協働することで大きな達成感、充実感を得ることができ、非認知能力の向上につながることが確認できた。自己肯定感や自己有用感、コミュニケーション能力や学級の連帯感を高める一つのツールとして、グループでの課題解決学習を十分に生かしていく。